

Mint Club

Orders & Decorations



財務省造幣局

ANAワールドマネーフェア

米国最大のマネーフェア開催

去る7月31日（水）から8月4日（日）にかけ、米国ニューヨーク市にあるマリオット・マーキースホテルを会場として、アメリカ貨幣協会（ANA : American Numismatic Association）が主催する世界マネーフェア（World's Fair of Money）が開催されました。その模様を視察しましたので、ご紹介します。

1. ANA主催世界マネーフェアとは

現在、世界各国では様々な貨幣に関する催しが開催されています。主なものとして、毎年1月末にはスイス・バーゼル、5月初には東京、9月末には中国・北京での国際的な貨幣フェアが知られており、そういうフェアには世界各国の造幣局等が出展し、様々な記念貨幣や貨幣セットなどを紹介することが恒例となっています。

米国で毎年7月末頃に開催されているこの「世界マネーフェア」もその一つで、全米の貨幣関連業者のほか、世界各国の造幣局やディーラーも集まり、一般客も大勢来訪することから、大規模な貨幣イベントとして国際的にも知られています。

この「世界マネーフェア」の主催者であるANAは、米国の非営利団体であり、貨幣やメダル、トーケン（代用貨幣）、紙幣などの収集や、それにまつわる教育活動の推進を目的として1891年に創設されました。コロラド州コロラドスプリングスに本部を置き、会員数は3万人、今年で111周年を迎えています。また、1912年以降は米国議会が付与した連邦憲章にもとづき運営されるなど、米国内では権威ある団体として評価されています。

2. 世界マネーフェアの模様

前述のとおり、今年の世界マネーフェアはニューヨークで開催されました。会場であるマリオット・マーキースホテルの5階及び6階は300社近い業者や各国の造幣局で埋まり、会期中の来場者数は延べ1万1千人以上、会場内は、約1年前のあの忌まわしい「9月11日」を微塵も感じさせないほどの熱気に包まれていました。

さて、会場で一際目立ったのが、6階会場のステージ上に設置された米国造幣局のブースです。ここでは50州クォーター・プログラムが紹介されていました。このプログラムは、1999年から始まり2008年までに、全米50州にちなんだ25セント貨幣50種類（年間5種類）を発行するというもので、現在までに20種類発行されています。今年はテネシー・オハイオ・ルイジアナ・インディアナ・ミシシ



6階全景（ホテルの5階・6階が会場、7階テラスではANA貨幣博物館所蔵品等の展示が行われていました。）

ユーロ）、それだけでも話題になりましたが、記者発表の際、ANA設立111周年を記念して、スペイン造幣局長がシリアル番号111番の同記念貨幣をANA会長に寄贈、これを開催期間中にインターネット・オークションにかけたことがさらに関心を呼びました。なお、オークションによって得られた資金（910ドル）はANA本部改築基金に充当されたとのことです。

また、世界マネーフェアでは、各国造幣局等の展示・販売のほか、ANA貨幣博物館所蔵物等の貴重な歴史的遺物の展示なども行われ、今回はニューヨークにまつわる貨幣やANA会員が所有するアジア地域の貨幣などが紹介されました。教育的活動としてはこの他、貨幣に関するセミナーなども開催されています。

3. わたしたち日本造幣局の参加

今回のANA世界マネーフェアについては、日本造幣局の参加は視察だけにとどまりましたが、こういったイベントを通して各国の様々な貨幣に精通するとともに、海外の造幣局関係者やお客様と直に意思疎通を図ることは、わたしたち自身の製品やサービスの向上、また、海外販売の可能性を探る機会として非常に重要なと考えています。そのため、すでにスイスのバーゼルやシンガポール、東京、中国北京で開かれる国際マネーフェアでは製品の紹介や販売を行ってきました。

こういったわたしたちの国際的な取り組みにつきまして、今後とも皆様のご理解を得られますことを心より願う次第です。

参考：アメリカ貨幣協会ホームページ（英語）<http://www.money.org/>

ッピー各州の25セント貨幣（米国では“クォーター”と呼びます）が発行され、同局のブースでは、未流通のクォーター5種類を1組にした貨幣セットや、本来は白銅製であるクォーターを銀製ブルーフ貨幣に仕立てたセットが販売されていました。

他の造幣局の中で話題になったのはスペインです。同造幣局は、バルセロナの著名な建築家ガウディの生誕150年を記念するユーロ貨幣について記者発表を行いました。この記念貨幣はユーロ・コインの中では額面が最も高く（400

日本初の カラーコイン誕生!!

このたび、平成15年2月1日から2月8日までの期間に青森県で開催される第5回アジア冬季競技大会を記念するための貨幣を発行することになりました。

今回の記念貨幣は、我が国で初めての貨幣に彩色を施したカラーコインとなっています。

貨幣の表は、雪上の代表的な競技としてスキー回転競技の選手を、氷上競技の代表的な競技としてスピードスケートの選手を描き、背景に飛び散る雪の結晶とシュプールラインを配し、躍動する選手たちを表現しています。

裏は、大会のシンボルマークと、青森県を象徴するイメージである“りんご”を図案化したものに、白、青、赤、濃い赤の4色を配した図柄となっています。

今回のカラーコインに使用されている技術は、金属表面への印刷方法として開発された技術で、具体的には、印刷色ごとに作成された版により、貨幣表面に多色印刷するものであり、造幣局においては通り抜け記念カラーメダルの製造に応用してきました。

今回のカラーコインの特徴は、貨幣表面の精巧なレリーフの上にカラー印刷を施したものであり、造幣局のデザイン技術と金型技術の組み合わせによって、貨幣素材面に美麗に映える印刷を可能としています。



表

裏

貨幣の概要は、以下のとおりとなっています。

第5回アジア冬季競技大会青森2003 千円銀貨幣の概要

額面	素材・品位	重量	直径	仕様	製造枚数
千円	銀・純銀	31.1 g	40mm	ブルーフ仕様	5万枚

今回の記念銀貨幣は、ワールドカップサッカー大会記念銀貨幣に引き続き、製造費用が額面価格を超えるもので、政府が額面価格以上の価格で販売するいわゆるプレミアム型の記念貨幣となっています。

貨幣の販売につきましては、金融機関などの窓口における引き換えは行われず、別途政令で定める価格により造幣局で販売します。

造幣局には、貨幣の図柄や金属工芸品のデザインを行う
「工芸管理官」という職場があります。
第1回は、今まで図案・彫刻に携わっておられた諸先輩と、
その作品を記念貨幣(昭和60年まで)で紹介します。



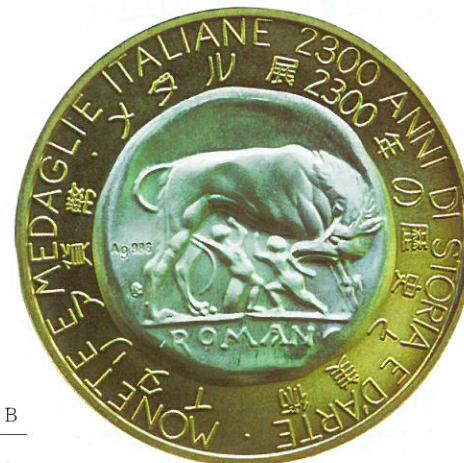
貨種別	原図製作者	原型製作者	発行年
① 東京オリンピック記念 1000円銀貨幣	表 裏 鈴木 和雄 宮崎 博夫	表 裏 沢野 基良 松岡 隆範	昭和39年
② 東京オリンピック記念 100円銀貨幣	表 裏 一般公募 前島 晶子	表 裏 小柴 利孝 沢野 基良	昭和39年
③ 日本万国博覧会記念 100円白銅貨幣	表 裏 谷口 俊弘	表 裏 小柴 利孝	昭和45年
④ 札幌オリンピック記念 100円白銅貨幣	表 裏 宮崎 博夫 谷口 俊弘	表 裏 小柴 利孝 川隅 重美	昭和47年
⑤ 沖縄国際海洋博覧会 100円白銅貨幣	表 裏 谷口 俊弘	表 裏 松岡 隆範 川隅 重美	昭和50年
⑥ 天皇陛下御在位50年記念 100円白銅貨幣	表 裏 谷口 俊弘	表 裏 松岡 隆範 川隅 重美	昭和51年
⑦ 国際科学技術博覧会記念 500円白銅貨幣	表 裏 一般公募 中里 敏夫	表 裏 松岡 隆範 川隅 重美	昭和60年
⑧ 内閣制度創始100周年記念 500円白銅貨幣	表 裏 谷口 俊弘	表 裏 川隅 重美 松岡 隆範	昭和60年



造幣博物館所蔵・外國章牌紹介 3



A. イタリア貨幣メダル展記念牌、表。イタリア造幣局製。中央に紀元前三世紀のロオマ造幣局で作られたディドラクマ銀貨の表を模刻したものを置き、外縁にイタリア語と日本語で「イタリア造幣・印刷局。大阪1991」の文字がある。



B. 全左、裏。中央にディドラクマ銀貨の裏の「狼に育てられるロムルスとレムス」の模刻を置く。「ROMANO」の文字があり、左方に「Ag986」の打印がある。外縁部にイタリア語と日本語で「イタリア貨幣・メダル展2300年の歴史と美術」の文字がある。

平成三年（1991）四月二十三日から五月二十六日迄、大阪市立美術館に於て「イタリア貨幣メダル展（2300年の歴史と美術）」と題する展覧會が開かれた。これは造幣泉友会とイタリア造幣局、イタリア文化環境廳、大阪市立美術館、日本経済新聞社が主催したもので、學術的に極めて程度の高いものであった。

この時の記念メダルには二種あり、一つは中央部が986位の銀7.6g、外縁部が917位の金12.4g、計20gのバイメタル（二種金属）のもの、他の一つは986位の銀で外縁部だけ金鍍金を施した14gのものである。直徑は共に32mmで一見殆ど同じであるが値段は大きく違ふ。イタリアの造幣局は1982年に外縁部に白銀色のアクモニタルと呼ばれるステンレス・スチール、中央部に黄金色のアルミ青銅を用いた500リレのバイメタル貨幣を初めて製造した。この二種の金属を壓印時に完全に疊合させて固定する技術で特許を取つてゐる。このイタリア造幣局自慢の技術をこの記念メダルに應用したのである。

残念なことに當造幣博物館が所蔵してゐるのは金鍍金による普及版の方である。

メダルが直徑32mmと小さいので擴大寫眞のみを示すこととする。

（元工芸管理官 松岡隆範記）



奈良文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部
考古第二調査室長 松村恵司

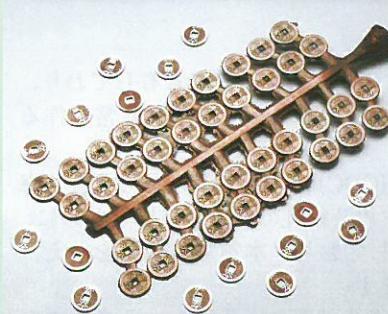
富本錢と古代の造幣局

和同開珎が発行された和銅元年（708）を遡ること25年前、天武十二年（683）に「今より以後、必ず銅錢を用いよ。銀錢を用いることなけれ」という詔が『日本書紀』にみえる。また持統8年（694）や文武3年（699）にも鑄銭司の任命記事がみえ、7世紀後半に銀錢や銅錢が存在し、鑄造貨幣の発行に着手したことを史書は明記する。和同開珎に先行するこれらの銅・銀錢とは一体何か。古錢研究が始まった江戸時代以来、多くの研究者を悩ませ、様々な憶測がなされてきた。唐の開元通寶の使用説をはじめ、無文の銅・銀錢の使用を想定する説、和同開珎の発行年代を遡らせる説、さらには史料の信憑性を疑う説などが主なものであるが、どれも説得力や決め手を欠き、7世紀後半の銀・銅錢の実体は、長らく貨幣史や古代史の謎とされてきた。

ところが1998年、飛鳥の中核部に営まれた飛鳥池工房遺跡から、7世紀後半の遺物とともに富本錢の未成品が大量に出土し、謎の銅錢が「富本錢」とよばれる錢貨であること、そして切断された無文銀錢の出土から、銀錢が「無文銀錢」とよばれる貨幣であることが明らかになった。天武天皇の詔の真意は、それまで貨幣的機能をもって流通していた地金の銀（無文銀錢）を廃して、中国式の鑄造銅貨（富本錢）の使用を命じたものと理解できるようになった。

飛鳥池工房遺跡から出土した富本錢は、560点にのぼる。その殆どは鑄造時の失敗品で、湯流れ不良の小片であるが、完形に近い富本錢の平均重量は4.36g、直径は2.4cmである。この規格は、『旧唐書』食貨志に記された開元通寶の規格に合致し、富本錢が武徳4年（621）発行の開元通寶の規格を忠実に模倣して造られたことを示している。

また「富本」の錢文は、後漢を再興した光武帝が、武将馬援の「民（國）を富ましむる本は食貨にあり」という上申によって、漢貨「五銖錢」の鑄造を復活し、貨幣に対する天下の信頼を回復したという有名な故事に由来する。左右に並ぶ七曜文は、陰陽五行思想の陽（日）と陰（月）、木火土金水にあたり、天と地、陽と陰の間で、五行（五氣）が順序正しく循環する様子を図像化したものである。これは、円形方孔錢の形状が天圓地方を象り、宇宙の調和がとれた姿を示す、という中国古来の思想を反映した文様である。このように富本錢は、中国貨幣の単なる形態上の模倣にとどまらず、貨幣に関する思想や歴史の体系的な理解の上に立って、独自の錢文が考案されている。



復元された富本錢

東アジア世界の中では、大唐帝国に次ぐ鑄造貨幣の発行であり、唐に並ぶ国家造りの一環として、富国、富民の願いをこめて富本錢が発行されたことが分かる。

一方、これまで持統・文武朝の鑄銭司任命記事に関しては、和同開珎発行に至る錢貨鑄造計画とその準備過程（試鋳）を示す記事、もしくは有名無為の機関の設置、という苦しい解釈がなされてきた。しかしながら飛鳥池工房遺跡から、富本錢を鑄造した炉跡や鑄錢

関係遺物が大量に発見されたことにより、飛鳥池工房遺跡が持統・文武朝の鑄銭司に該当する可能性が高まった。飛鳥池工房遺跡は、律令国家の貨幣鑄造官司の一部を構成する遺跡であり、今日の造幣局のルーツとも言うべき遺跡である。

飛鳥池工房遺跡からは、富本錢の未成品をはじめ、鑄型、地金を溶解したルツボ、送風管の先端に装着した土製の羽口、鑄棹や堰、溶銅、打ち落とされた鑄バリなど、富本錢の鑄造時に生じた生々しい遺物が出土している。さらに仕上げに用いたヤスリや砥石も出土しており、これらの遺物から富本錢の鑄造技術や製作工程の復元が可能になった。その成果をもとに、本年、富本錢の鑄造復元を試みたところ、アンチモンを10%混入した溶銅は、鑄型の中をきわめてスムーズに流れ、写真にみるような枝錢の復元に成功した。富本錢の地金の溶解に用いたルツボの容量計算によると、このサイズの枝錢を5枝鑄造しても、ルツボ内になお1割の溶銅が残る計算となり、一度の鑄込み作業で200枚程度の富本錢が鑄造されたようである。また工房跡に残る多数の炉跡から判断すると、鑄型の造型作業、鑄込み作業、ヤスリかけ作業、砥石による研磨作業は別々の空間で行われ、多数の工人が作業を分担して富本錢の大量生産に従事した様子を窺うことができる。復元された富本錢は、当時と変わらぬ金色味を帯びた淡く美しい銅色の輝きを放っている。

〔参考文献〕

- 松村恵司「富本七曜錢の再検討」『出土錢貨』第11号 出土錢貨研究会 1999年
松村恵司「富本七曜錢の鑄錢技術」『出土錢貨』第12号 出土錢貨研究会 1999年
松村恵司「富本錢—貨幣の誕生を考える」『別冊歴史読本』第25巻第10号 2000年

国際コインデザインコンペについて

貨幣は、経済的機能のみならず、その国の文化を象徴する機能も有しており、古来、世界各国において、格調がありかつ親しみやすいデザインの貨幣を作る試みがなされました。

国際コイン・デザイン・コンペティション(ICDC)は、国内のみならず広く海外からデザインを募ることにより貨幣デザインの芸術性の向上を目指すために、造幣局及び(財)造幣泉友会が1998年から開催しており、本年で5回目を数え、応募作品数も回を重ねるごとに増えてきています。

ICDC2001には、一般部門に16カ国39作品、学生部門に1作品という多数の応募がありました。

平面図案による第一次審査により5作品を選び、これらの作品についてさらに石膏原版による第二次審査を行った結果、一般部門での受賞作品、平面図案による学生部門の受賞者が決定しました。(ちなみに本年のICDC2002は審査中ですが、一般部門に16カ国56作品、学生部門に6カ国11作品が寄せられています)

このほど造幣局では、これらの作品の中から最優秀賞に選ばれた作品をメダル化して販売することとしました。

このように優秀なデザインのメダル化を図ることを通して、貨幣デザインの更なる芸術性の向上につながることを願ってやみません。

皆様には、世界のデザイナーによる『理想の貨幣』をお楽しみいただければ幸いです。

ICDC2001のメダルについて

作品テーマ 『水—命の象徴・火—愛の象徴』
作 者 ニコラ カゾン氏、ジャン-リュック マレシャル氏
 (両氏ともフランス造幣局職員です。)

メダル仕様
材 質 銀 製
直 径 30ミリメートル
重 さ 約13.5グラム
価 格 3,500円（消費税込み、送料別）

平成15年1～3月販売貨幣セット情報

販 売 区 分	種 類	販売予定価格	販売予定期間	参 考
通年販売貨幣セット	記念日貨幣セット	2,100	2月以降	8,300
	〃（録音機能付）	3,000	2月以降	—
	ペーパーウエイト	4,000	2月以降	4,000
	ジャパン（フル）	2,000	2月以降	7,300
	コインセット	1,000	2月以降	5,000
	ジャパン（シンプル）	900	2月以降	4,000
	見学記念貨幣セット			

(注) 1. 販売する貨幣セットは平成15年銘です。

2. 上記貨幣セットの販売予定期間は変更する場合があります。

3. 参考欄は13年銘の製造数量です。



今回も、第2号でご紹介をさせていただいたものと同様のおたよりを多数いただきましたが、本号におきましては、それ以外のおたよりをご紹介させていただきます。記事内容へのおたよりでは、「造幣局とニュートンは興味深かった」、「金貨の製造工程は興味深かった」、ミントクラブには、「もっとページ数を増やして内容を充実させてはどうか」、「貨幣の歴史や発行の起源等も順次記載してほしい」、「ミントクラブは季刊発行か」等のおたよりをいただきました。ミントクラブの発刊については、なるべく多く発刊できるよう編集を進めていきたいと思っています。

なお、造幣局に関する情報につきましては、私どものホームページURL : <http://www.mint.go.jp/>でもご紹介しておりますのでご覧になつていただければ幸いです。また、お葉書、お電話でのお問い合わせにつきましてもお答えしております。

ミントクラブは、皆様からのお声をお聞かせいただきながら、一層の誌面の充実を図って参りたいと考えておりますので、よろしくお願ひいたします。

編集後記

今回は、トピックスとして世界各国において開催されている貨幣に関するイベントについて、アメリカで開催されましたANAワールドマネーフェアにスポットをあて、その模様を紹介させていただきました。

私たち日本造幣局もミントクラブ創刊号や第2号で紹介させていただきましたように世界造幣局長会議を日本で主催するなど国際的な地位も高まってきており、今後もこうしたイベントへの積極的な参加が必須となっております。また、こうした国際的なイベントへの参加により、日本造幣局の製品紹介のほか貨幣に対する国際的な感覚を養うとともに、各國造幣局担当者等との交流を通して、お客様へのサービス向上の方向性などを学んでいきたいと思っております。これからもこういった海外でのイベントを紹介していくと思いますのでご期待下さい。

このミントクラブはエコマーク商品に認定された再生紙を使用しています。

発行所 財務省造幣局
 〒530-0043 大阪市北区天満1丁目1番79号
 電 話 06(6351)5105
 造幣局ホームページ <http://www.mint.go.jp/>

編集者兼発行人 山村 武史
 平成14年11月18日発行（第3号）

Minting

Metallic Art Objects

Hallmarking

Testing & Analysis

Circulating Coins

Commemorative Coins

